

新年のごあいさつ 伊豆の国市の さらなる発展



伊豆の国市長
望月 良和

明けましておめでとございます。
市民の皆様には、ご家族様おそろいにて輝かしい新春をお迎えのことと拝察申し上げます。

わが伊豆の国市は誕生以来五年目を迎え、平成十八年度に作成した第一次総合計画に基づき、三つの戦略と六つの柱を中心に、災害対策・子育て支援・交通対策・健康づくり・上下水道や住環境の整備・観光振興などの事業が順調に進捗しています。これには、市民の皆様をはじめ、議会や関係者の皆様のご支援ご指導の賜物と心より感謝申し上げます。

さて、昨年は日本列島に台風の影響が一度もなく、私たちの伊豆地方は比較的平穏な一年でした。しかし全国各地では地震やゲリラ豪雨といわ

平穏かつ稔り多い一年となりました。今年も無災害であつてほしいと願うものです。
伊豆の国市が誕生し四年が経過しようとしています。これまで『第一次伊豆の国市総合計画』に基づき、合併してよかつたといふ旧町からの継続事業や、旧三町の一体化を図るための施策が行われてきました。関係者のご尽力と市民の皆様のご協力により成果が上がっています。ことば、大変喜ばしく思っています。さて、米国発の金融危機に端

れる集中豪雨により六百六十にもおよぶ地域で災害が発生し、二十名余の方々が亡くなられています。地球温暖化をはじめとする地球環境の変化に、改めて危機管理の大切さを痛感するとともに、市民の皆様と協同で進める地球温暖化対策への更なる取り組みの必要性を痛感します。

今年の干支は、『丑』ウシです。ウシは、歩みの遅さなどから『鈍重』なイメージもありますが、何事にも動じず、どしどしと構えている重厚さも持ち合わせています。現在、世界的に先行きの不透明感が漂っており、日本でも景気は下降局面に入ったといわれています。こういふ時こそ、『牛の歩みも千里』といわれるように、慌てて時代の変化に流されないように着実に歩を進め、市民の皆様が安心していただける盤石な行政運営を行っていき

を發し、世界同時不況の様相が広がっています。日本も円高、株安、貸し渋り、企業の減産減収、雇用の悪化など、実体経済の後退は著しいものがあります。伊豆の国市も例外ではないものと懸念しています。

このような中、市当局の平成二十一年度予算編成が始まっています。先の地方分権改革法に基づき、国庫補助金、地方交付税等の削減などがもたらす財源不足に加え、この度の景気停滞による税収への影響により、予算編成は大変厳しくなるものと思われ、財政難を理由とした教育・福祉・環境などの予算の縮小は難しいものと考えます。このようなときこそ、改革の好機ととらえ、無駄がない、効率のよい、豊かさを実感できる伊豆の国市の実現に向け、行政とともに努力し、議会のチエツ

たいと思います。

今年もすでに平成二十一年度の予算編成に入っています。今年の特徴は、昨年の中国四川省の大地震による教訓から、保育園や幼稚園の園舎をはじめ、小中学校の校舎の耐震化が喫緊の課題となっています。また、静岡県において十月から十一月にかけて第二十四回国民文化祭（四ページで紹介）が開催され、伊豆の国市では江川坦庵公をメインテーマとして、演劇や合唱、オペラなど六つの部門に挑戦します。どうぞご期待ください。

一方、昨年から食の安全が以前に増して大きな問題となっています。私は市長就任以来、一貫して食の安全には農業が重要であると主張してきました。今年も第一次総合計画の『食と農』をキーワードにした安全・安心・健康のまちづくり戦略を推進し

ク機能をも發揮していかなければならないと考えます。

私も議会では、市議会調査検討特別委員会を設置して、次期（この四月）からの議員定数を二十二人に削減するなど、さまざまな改革を進めてきました。さらに政策集団たる伊豆の国市議会を目標として努力し、市民の負託にこたえる市議会をモットーに、『皆様にとって何がベストか』を判断基準として議会活動に取り組む、伊豆の国の将来像である『自然を守り、文化を育む、魅力ある温泉健康都市』の実現のため、議会の責任と役割を果たしてまいりたいです。これからも皆様の変わらぬご支援ご協力をお願い申し上げます。
年頭に当たり、新しい年が皆様にとって素晴らしい年であり、ますよう祈念申し上げます。新年のあいさつといたします。

め、市民の皆様や本市を訪れる皆様に安心でおいしい『食』食が提供できる環境を整えていきたいと考えています。
結びに、市民の皆様のご健康とご多幸を祈念申し上げます。年頭のあいさつといたします。

今年は何年

今年の干支は、『己丑』です。十干は六番目の『己』。万物を育む田畑や田圃の土を象徴します。十二支は二番目の『丑』。『丑』の字は、『紐・からむ』の意味で、芽が種子の内部でまだ伸びることができない状態を表します。

ウシは、肉は大切な食料に、力は労働にと社会に密接に関わる動物。この干支は、『粘り強さと誠実』を象徴しています。宗教の世界では神の使いとして紹介

され、日本では平安時代の貴族の乗り物は、ウシが引く牛車でした。日本に伝わる十二支の話では、ウシはこう語り継がれています。
大昔のある年の暮れ、神様が動物たちにお触れをします。

「元日の朝、新年の挨拶に一番早く来た者から十二番目の者までは、順に一年の間、動物の大將にしてやろう」



ウシは、歩くのが遅いので一足先に出かけようと、まだ暗いうちから出発し、一番乗りで到着。喜んで待つうちに門が開くと、なんと、ウシの背中から飛び降りたネズミに先を越されてしまいました。でも、『ウシの歩みも千里』。怠けることなく努力を続けければ、必ず成果は上がります！



伊豆の国市議会議員
増島 一良